

図書情報センターニュースレター

(旧 図書館ニュースレター)

(改訂版) 第9号

■ 自動貸出機による図書の貸し出しサービスを開始しました。



図書館では、本年10月1日より自動貸出機による図書の貸し出しサービスを開始いたしました。これにより、図書館開館日の開館時間内 (https://libopac.kobe-ccn.ac.jp/opac/opac_search/) であれば、係員の業務時間終了後も図書の貸し出しが可能になります。使用方法は貸出機に表示していますので、お気軽にご利用ください。

【自動貸出機の設置場所】 図書館 1F カウンター中央部

【ご注意】 自動返却機能はありませんので、係員の業務時間以外の図書の返却は、図書館入口ポストにお願いします。また、予約・取り置き本のお渡しは係員在席時のみとなります。

■ 図書の貸出し可能冊数や期間を試験的に一部増やしています。

10月1日より、卒業生・修了生の図書貸出し可能な冊数や期間を従来の5冊2週間から10冊4週間に、また、学部生に関しては10冊2週間から10冊4週間に増やしています。これは卒業生からの要望をきっかけとして、学部生についても改めて検討して当面試験的に実施するものです。また、卒業生・修了生のラーニングコモンズ利用に関しても、来館時に空いていれば利用できることとしました（予約は不可）。みなさまどうぞご利用ください。

■ 特別展示コーナーのご紹介

1) 宮子あずさ氏（看護師、作家、コラムニスト）著作コーナー

（慢性看護学分野教員・樋口佳耶先生による紹介文）

1987年から、看護師として働き続けている宮子あずささん。現在は、精神科の病院に勤務されています。宮子さんの本を読むと、「どんな自分でもいいのだな」、「どんな感情をもってもいいのだな」と、自分を許してあげられる。同時に、ものの見方がやわらかくなり、少し優しい自分になれる。そんな気持ちになります。これはきっと、本を通して、宮子さんの優しさや寛容さに触れることができるからです。宮子さんの本、皆さまもぜひ手に取ってみてください。各本の中で、印象に残っているフレーズ等とともに展示しています。

*10/26（土）の神戸看護学会学術集会（開催地：本学）で、宮子さんのご講演があります。宮子さんに会いたい方、ぜひお越しください！

2) 川嶋みどり先生著作コーナー

今年度の本学の看護専門職講座（11月9日（土）10時から本学ホールにて開催）で「今、看護に必要なこと～92歳現役看護師からのメッセージ～」と題してご講演いただく川嶋みどり先生の著作コーナーを設置しています。川嶋みどり先生は、90歳を超えてもなお、「人間らしく生きること」をテーマに、看護の役割や使命について発信されており、ご講演など全国で活躍されています。この機会にぜひ著作コーナーもご覧ください。なお、看護専門職講座の申し込みは以下のフォームからできます（10月31日締切）。<https://forms.office.com/r/CmZ3HXfTth>

3) 神戸市の看護教育・神戸市看護大学の歩みに関する資料展示

2年後の2026年には、神戸市看護大学が開学30年を迎えるとともに、現在の神戸市看護大学での教育につながる神戸市での看護教育が始まって100年となる記念すべき年を迎えます。神戸市看護大学では、これらを記念する式典やイベントなどを計画中ですが、図書館でも、関連する資料の収集を始めています。図書館内にある関連資料を集めて展示を始めていますので、まだ数は少ないのですが、ぜひご覧いただくとともに、関連資料をお持ちの方がおられましたらお知らせいただくと助かります。

1) 2) の著作展示コーナー（展示書籍リストもご用意しています）は図書館内ゲートを入ってすぐ左側近辺で、また、3) の資料展示は正面奥の学術雑誌コーナーの手前にて実施中です。新たな特別展企画の提案があれば、ぜひ図書館までお寄せください。

■ 教職員の推薦図書を紹介します。

昨年度からスタートした企画（特設展示コーナーあり）で、どれも図書館に置いている書籍です。前回のニュースレター（今年3月発行）以降に推薦のあった分について、教職員自らのメッセージとともにご紹介します（今回はいずれも漫画です！）。引き続き、おすすめ本をお寄せください。

1) 「ひとりでしにたい」ドネリー美咲、カレー沢薫（講談社）

実習やカンファで聞いたことがあるストーリーをコミカルな表現とともに再考できる漫画。現実を忘れさせない、向き合わざるを得ない、と評価されています。（稲垣 聡 先生（基礎看護学分野））

2) 「健康で文化的な最低限度の生活」柏木ハルコ（小学館）

福祉事務所で生活保護に携わるケースワーカーとして配属された新米公務員を描いた漫画です。生活に困窮する方の「健康で文化的な最低限度の生活」を保障するための最後のセーフティネットとも呼ばれる生活保護制度ですが、その運用には厳格なルールが設けられています。ルールの枠組みの中でなんとか要望に応えようと悪戦苦闘する主人公ですが・・・

丁寧な取材により描かれた本作には気が滅入るような重たいテーマも少なくないのですが、筋書のリアルさに現場のプロからの評価も高いようです。どの業界も外部からはうかがい知れない大変さがあるものですが、この漫画でケースワーカーの仕事の難しさの一端を垣間見れたような気がします。そして社会人一年生には荷が重過ぎるような業務をこなす主人公には心からのエールを送りたくなりました。困っている人を助ける、という意味でケースワーカーも医療従事者も意義ややりがいがある立派な仕事だと思いますが、同時に共通の難しさや大変さを伴う仕事のように思えます。未来の医療従事者にも是非一読いただきたい漫画です。（図書館）

★図書情報センターニュースレターは不定期で発行しています。本学 HP の図書館ページに掲載し、学内には「いちかん」等にて配信いたします。図書館内では紙媒体でも若干部数をご用意しますのでご自由にお取り下さい。

■ 11月11日まで図書館アンケートを実施中です。

現在、図書情報センターでは11月11日まで、本学学部学生、大学院生、教職員を対象に、2年に一度の図書館アンケートを実施中です。利用者視点での図書館の現状を知り、より良い図書館にしていくために重要な情報となりますので、アンケート回答へのご協力をお願いいたします。

■ 図書情報センターノート

開かれた図書館

地元創成看護看護学実習で地区に出向いたときに、名谷駅に新しくできた名谷図書館を訪れる機会がありました。私も図書館カードを作り、館内を少し見学させていただきました。平日の昼間にもかかわらず、多くの地域の方々が利用しており、その活気に驚かされました。この光景を目にしたとき、私はかつて在外研究でシアトルに滞在していたときのことを思い出しました。友人も家族もいない異国での生活は、必然的に本や仕事との時間が増え、私はシアトル中央図書館やショアライン図書館で多くの時間を過ごしました。そこでも、多くの人々が読書を楽しんでおり、その図書館は「知識を得る場」として広く活用されていました。名谷図書館もまた、多くの方々がじっくりと本に向き合い、「この方は一体どれくらいの時間ここにいらっしやるのだろう」と考えながら歩きました。（もちろん、涼しい空間で快適に過ごせることも魅力の一つですよ！）

また、大学図書館も非常に興味深い場所です。たとえば、ワシントン州のワシントン大学の図書館では、市民にも開放されており、誰でも最新の医学論文にアクセスできる環境が整っています。私は市民と健康情報のつながりを研究しているため、こうした取り組みが「e-Patient Dave」のような市民運動を生む土壌であると感じました（「e-Patient Dave」については、ぜひYouTubeなどで検索してみてください！）。ワシントン大学の司書の方々は、市民にPubMedなどの使い方や、信頼できる情報の見極め方を伝える役割も担っていました。このように、市民が良質な情報にアクセスできるようになることで、健康や幸福が自然と向上する未来があるのではないかと、私は信じています。

現在、インターネットで簡単に情報が得られる時代ですが、図書館は今後どのように市民のWell-Beingに貢献できるのでしょうか？こうしたコラムや意見箱、図書館アンケートを通じて、皆さんと一緒に考えていけたら嬉しく思います。ともに、より素晴らしい図書館を作り上げていきましょう。

稲垣 聡（図書情報センター委員会委員・基礎看護学分野教員）

気まぐれ濫読日記抄

今回の芥川賞受賞作の1つ、松永K三蔵「バリ山行」。舞台は六甲山。作中の重要人物、ある中小企業に勤務する妻我さんの歩くバリエーションルートは、私自身の^⑧コースでもあり、その行動は私とも重なる気がした。神戸の病院で起きた事件とその背景に迫ったルポ「穢の生えた病棟で（神戸新聞取材班）」。どんな組織でも起きうる問題だと思う。「顔に取り憑かれた脳（中野珠実著）」。自他の顔認識が絡む認知科学、発達心理学から、顔と人間の未来まで？最新の成果に基づく興味深い話題満載。

二木 啓（図書情報センター長・専門基礎科学領域医科学分野教員）